



Title	日本における複数言語環境で育つ外国ルーツの若者の言語使用とその意味づけ：幼少期に来日した若者の語りから
Author(s)	呉, 静妍
Citation	母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究. 2025, 21, p. 68-80
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/102060
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

《研究ノート》

日本における複数言語環境で育つ外国ルーツの若者の
言語使用とその意味づけ

— 幼少期に来日した若者の語りから —

呉 静妍（昭和女子大学大学院 博士後期課程）

wujingyan2022@gmail.com

**Language Use and Its Significance for a Young Individual with Foreign Roots
Growing Up in Multilingual Environment in Japan:**

The Narrative of a Young Individual Who Migrated to Japan in Childhood

WU Jingyan

要 旨

本研究は、幼少期にブラジルから来日した若者を対象にインタビュー調査を実施し、言語使用の実態と各言語への意味づけを分析した。その結果、日本語は生活の基盤として不可欠であり、英語は将来のキャリアや視野を広げるためのスキルとして高く評価されていた。一方、ポルトガル語は家庭内で使用されているものの、ポルトガル語母語話者からの発音や言葉遣いの指摘がアイデンティティと言語使用に影響を及ぼし、積極的に使用されていないことが分かった。「ネイティブのように話さなければならない」という固定観念を見直し、ネイティブレベルに達していなくとも複数の言語を効果的に使い分ける意義を認識することが、文化的・言語的に多様な背景を持つ子どもの自信と意欲を高める鍵となるだろう。外国人が増加する日本社会において、外国にルーツを持つ個人が自身の複言語使用を肯定的に捉え、自身を支える能力として認識することが重要になると考えられる。

Abstract

This study investigates the actual use and perceived significance of multiple languages using data from an interview with a young individual who migrated from Brazil to Japan during childhood. The findings indicate that the respondent considers Japanese indispensable as the foundation of daily life and highly values English as a skill for expanding career opportunities and broadening one's horizons. In contrast, although Portuguese is primarily used at home, it is not actively maintained due to criticism on pronunciation and word choice from native speakers of Portuguese, which influences the linguistic identity and engagement of the interviewee with the language. Reevaluating the prevailing notion that one must speak similar to a native and recognizing the importance of effectively using multiple languages—even without attaining native-level fluency—are key to fostering confidence and motivation in children from culturally and linguistically diverse backgrounds. As the foreign population in Japan continues to grow, developing a positive perception of their multilingual abilities and recognizing them as valuable assets that

contribute to personal and social development are crucial aspects for individuals with foreign roots.

キーワード：複数言語環境、複数言語使用、外国ルーツの若者、言語使用の変化、言語の意味づけ

1. はじめに

近年のグローバル化に伴い、日本に定住する外国人の数は増加の一途をたどっている。この動向は、外国にルーツを持つ児童生徒の増加にも直結しており、文部科学省（2024）の調査によれば、日本語指導が必要な児童生徒の数は年々増加している。そのため、教育現場における言語支援の必要性がますます高まっている。こうした児童生徒の中には、幼少期に来日し、その後長期間にわたって日本の教育課程で学び続ける者も多くいる。彼らは複数の言語を学習または使用する複雑な言語環境に身を置き、その言語使用は、母語のみを学習・習得し、運用する場合とは異なる特徴を持っていると考えられる。そこで、本研究は、幼少期に来日し、日本の学校教育を受けながら複数言語環境で育った外国ルーツの若者¹⁾が、どのように言語を使用し、それにどのような意味づけを行っているかを明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

2.1 用語の定義および理論的背景

Skutnabb-Kangas（1981）は、母語を以下の四つの基準から定義している。①習得順序（最初に覚えた言語）、②運用能力（最もよく理解できる言語）、③機能性（最も頻繁に使用される言語）、④アイデンティティ（内的基準としてその言語を自身のものだとして認識する言語、外的基準として他者からその言語のネイティブスピーカーとして認識される言語）。このように、母語は多角的な概念であり、複数言語環境で育つ人々の母語認識は状況により変化する可能性がある。

また、母語に関連する概念として「継承語」がある。中島（2017）は、継承語とは親の言語、子どもにとって親から継承する言語であり、継承語教育とは親の母語を子に伝えるための教育支援であるとして位置づけている。本稿では、中島の定義に従い、親から継承した言語を指す際に「継承語」という用語を用いる。

複数の言語を使用する人の言語に対する捉え方を説明する考え方として、ヨーロッパ言語共通参照枠（以下 CEFR）で提唱される複言語主義がある。奥村（2022, p.218）は、複言語主義を以下のように説明している。

複言語主義とは、個人が持つ複言語能力をその人特有の一つの言語単位として積極的に認める考え方である。複言語能力とは、個人の言語体験を通して獲得される様々な言語および言語に関する能力の総体である。（中略）つまり、複言語能力とは部分的能力が相互に絡み合い補完的に構成される統一体といえる。個々の部分的能力のレベルは異なるため、複言語能力は多様な言語能力が不均衡に混在した状態となる。これには母語などの単一言語内の能力不均衡も含まれる。よって、複言語能力の「複」には、複数・複雑・複合的・複層的という意味が内包され

ている。また、個人の言語体験は常に更新されるため、複言語能力は生涯にわたり変化し続ける。

この視点では、複言語能力において特定の言語がネイティブレベルである必要はなく、部分的能力を補完的に活用することが重視される。また、複言語主義は言語能力を包括的に捉えることで、異文化理解や社会的包摂を促進する意義を持つ。したがって、複言語主義は、複数言語を使用する若者の言語使用状況を理解する上で有用であり、本研究の理論的背景として位置づける。

2.2 日本における複数言語環境で育つ若者の継承語使用

これまでの複数言語環境で育つ子どもの継承語に関する研究では、継承語教育の意義や継承語教育の実践報告が主に行われてきた。しかし、若者が自身の継承語使用をどのように認識しているかについての研究は、管見の限りでは多くない。

太田（2021）は、6歳で中国から来日した若者1名を対象に、ライフストーリーを通して中国語使用に対する意識変容を調査した。その結果、対象者の中国語への意識は、成長過程で親や中国語話者、留学先での経験などに影響を受けて変容することが明らかになった。留学を通じて日本語か中国語の一言語で話さなければならないという「固定観念」が解消され、複数言語を自由に選択できるという認識を持つに至った点が特徴的である。

太田（2022）は、太田（2021）と同じ対象者のライフストーリーをもとに、複数言語環境における継承語の位置づけを考察した。対象者は家庭で日本語と中国語を使用し、職場では日本語と英語、趣味として韓国語を学ぶ複言語話者である。調査の結果、継承語である中国語は日常的に使用する日本語と同程度の存在感でありながら、母親の影響や「中国語は全く知らない言語ではない」という意識により、「学ばなければならない」と感じる特徴が確認された。太田は、継承語を現地語との比較にとどめず、複数言語環境全体の中での位置づけを考察することで、継承語の特徴をより詳細に把握できると論じている。

2.3 日本における複数言語環境で育つ若者の複数言語使用

本節では、複数言語環境で育つ若者の複数言語使用に関連する研究を取り上げる。

尾関（2013）は、9歳で来日したフィリピン出身の若者を対象に、日本語習得が自己形成に与える影響を分析した。その結果、日本語の使用経験は、学校やボランティア教室といった異なる場面において、対象者の立ち位置や、その場に参加する人々との関係性が変容する中で、自己と他者、社会との関わりを形成していく過程であることが明らかになった。対象者は、その多様な関わりの中で複数の言語や文化と向き合い、時には意識的に、また時には戦略的に自己の存在意義を確かめることで自己を見出しながら成長していた。一方、母語であるタガログ語については、言いたいことが言葉に出てこないことや、フィリピンの祖母とのコミュニケーションに困難を感じることはあるが、学習意欲はなく、フィリピンに帰国する意思もないことが報告されている。

広崎（2017）は、中国系ニューカマー第二世代4名の大学生を対象に、言語能力と学力形成の関係を調査した。調査対象者全員が日本生まれ、または就学前に来日し、成長過程で中国語を学習・使用していたが、幼少期から日本語の「伝達言語能力」²⁾が優位であり、その後の「学習言語能力」²⁾も日本語で形成されたことが明らかになった。

今（2019）は、外国にルーツを持つ大学生 6 名を対象に、言語選択と管理に焦点を当てた。対象者は複数言語環境で育ち、日常的に複数の言語を使用している。そのうち 4 名は日本で生まれ育った者である。この研究では、彼らがどの言語を習得の対象として選択するかを「言語習得に対する管理」として捉え、その特徴を当事者の視点から明らかにした。その結果、対象者は日本語や継承語に加え、自身のルーツや将来を考慮して言語を選択し、その選択には社会的評価や個人の価値観が影響していることが示された。この研究は、言語の問題を日本語と継承語の視点に限定せず、個人が行っている言語習得管理を多角的に考察する必要性を示唆している。

小林（2024）は、成長途中で来日し複数言語環境で育った大学生 1 名を対象者として、自身の複言語性や言語学習に対する意味づけがどのように変化するかを示している。その結果、複言語性に対する捉え方は、複数の言語資源に対する肯定的評価と否定的評価が混在する両義的な意味づけであることが確認された。また、複数言語学習に対する捉え方は、様々なライフイベントを経て、日本語の存在が大きくなったり小さくなったりしながら、変容していることが明らかになった。

2.4 本研究の位置づけ

上述した 2.2、2.3 の研究では、日本における複数言語環境で育つ外国ルーツの若者を対象に、様々な側面が探求されている。太田（2021、2022）は継承語使用の変容やその意味づけを、尾関（2013）は日本語学習が若者の成長と発達に与える影響を、広崎（2017）は言語発達と学力形成の関係を、今（2019）は言語習得に対する管理を、小林（2024）は複言語性や言語学習に対する意味づけの変容をそれぞれ焦点としている。これらの研究は、若者が複数の言語をどのように使用しているか、またその使用に対してどのような意味づけをしているのかを直接的に探究するものではないが、若者の言語使用の多様性や複雑性を浮き彫りにしている。しかし、若者の複数言語使用状況の実態や、各言語に対する具体的な意味づけを探究した研究は十分とは言えない。

以上の課題を踏まえ、本研究では、幼少期に来日し、日常生活に支障がない程度に継承語を習得している若者を対象とし、継承語、日本語、その他の言語の使用状況および各言語に対する意味づけを明らかにすることを目的とする。具体的には、以下の研究課題を設定する。

研究課題 1: 日本で育つ複数言語環境にある外国ルーツの若者の言語使用状況はどのようになっているか。

研究課題 2: 複数言語環境で育った若者は、各言語にどのように意味づけを行っているか。

3. 研究方法

3.1 調査協力者

本研究では、日本で育った複数言語環境にいる 1 名の若者（R）を対象としたインタビュー調査のデータを取り上げる。R を調査対象者として選定した理由は、R が幼少期に来日し、一定のポルトガル語能力を維持しながら、日本語と他の言語を習得するという複数言語環境で成長してきた点にある。

R は 20 代の男性で、ブラジルで生まれた。6 歳の時に両親の都合で来日して以来、一度もブラジルに戻ることなく、日本で生活を続けている。地元の公立高校を卒業後、複数のパートタイムの職を掛け持ちし、現在は主に地域の国際交流協会では生活相談業務に従事している。この業務では主に日本

語と英語を使用し、まれにポルトガル語を用いることがある。母親は日系二世で、日本語による日常会話には支障がないが、複雑な表現の理解に困難を感じている。父親はポルトガル語母語話者であり、母親ほどではないが、日本語での日常会話は可能である。両親ともに最も使いこなせる言語はポルトガル語であり、他に堪能な言語はない。R は来日以来、関東地方の非集住地区に居住している。現在は永住ビザを所有し、日本への帰化を申請中である。両親は将来的にブラジルに帰国する予定であり、日本に帰化する意向はないが、R の意思を尊重している。

R はポルトガル語を最初に習得し、その後、日本語と英語を学習した。現在は、日本語、英語、ポルトガル語の順に堪能であると自己認識している。以下の表 1 は、「CEFR 共通参照レベル：自己評価表」(2023) を用いて行った言語能力の自己評価を示している。

表1 Rの「CEFR共通参照レベル：自己評価表」による言語能力の自己評価

	聞く	読む	やりとり	表現	書く
ポルトガル語	B2	B1	B1	B1	A2～B1
日本語	C2	C2	C2	C2	C2
英語	C2	C2	B2	B2	C1

3.2 調査方法

本研究では、半構造化インタビューを用いて、2024 年 1 月と 6 月に各 100 分程度の対面インタビューを 2 回実施した。会場は公共施設で、調査目的や守秘義務を説明し書面で承諾を得た。1 回目のインタビューでは、生い立ち、学校生活、教育段階ごとの言語使用などの基本的な情報を中心に、幼少期から現在に至るまでのライフストーリーを収集した。2 回目のインタビューでは、1 回目の内容を確認しつつ、各言語の使用に対する意味づけや、言語習得に影響を与える要因、複数言語環境で育った経験について詳細に聞き取った。

インタビューで得られた語りを文字化し、幼少期から現在に至るまでの言語使用の変化と、それぞれの言語に対する R の意識や感じ方を時系列に整理し、各場面における言語使用や学習経験、ならびにそれらに対する R の思いを整理した。

4. 分析結果

以下に、インタビューから得られたデータに基づく分析結果を示す。発話データは、調査対象者の語りおよび筆者との対話から抜粋したものである。文中の（ ）内には補足説明を記載し、発話データの下に記載された数字は発話時間を示している。また、下線部は分析に必要なデータを強調するために示したものである。

4.1 複数言語環境におけるポルトガル語使用とその意味づけ

R は来日以降、家庭内では一貫して両親とポルトガル語で会話をしてきた。小学校時代には、ブラジルで教師をしていた母親から、主に週末にブラジルの国語教科書を用いたポルトガル語の教育を受

けていた。また、週末にキリスト教の教会イベントに参加することでポルトガル語に触れる機会もあったが、R自身が積極的に参加したわけではなく、発話は少なかった。ポルトガル語のメディア（テレビ番組、映画など）への興味もなく、中学校以降、学校生活が多忙になる中で、ポルトガル語学習の優先順位が低くなり、母親の教育を受けなくなり、教会イベントへの参加もしなくなった。高校時代には、病院や行政手続きなどで、両親の通訳役としてポルトガル語を使用する機会が増えた。現在は、職場で生活相談に応じる際にまれに使用することはあるものの、その頻度は低い。Rのポルトガル語の運用能力が維持された主な要因として、家庭内での使用、小学校時代に母親から受けたポルトガル語教育、高校時代から増えた通訳の経験が挙げられる。

次に、Rはポルトガル語にどのような思いを持っているかを分析する。

発話データ 1 ポルトガル語がネイティブではないという認識

僕のポルトガル語、ブラジルのネイティブの方に話しかけますと、逆に僕（僕のポルトガル語）が外国の人のように聞こえることだと思います、ネイティブのポルトガル語には聞こえないかも、ちょっと、ちょっと怪しいです。

1回目 10:03-10:37

発話データ 2 アイデンティティとポルトガル語の発音

僕は日本寄りかと思うんですけど、実際のところどうなのでしょうね。ブラジル生まれで、ブラジル人なんですけど、でもポルトガル語にも少しアクセントもありますし、少しブラジル人が話すポルトガル語ではありませんので、すぐにこの人外国人か、ブラジル人じゃない外国人か、ブラジル育ちじゃないブラジル人だになっていうのはすぐにばれちゃいます。

1回目 61:29-61:59

発話データ 3 周囲からの認識とポルトガル語に対する意識

筆者（ポルトガル語が）ネイティブじゃないと感じた理由は何ですか？

R 最近になって確実に分かりました、協会でブラジルの方を対応する機会が何回かありまして、「あなた日本人？」って結構聞かれるんです、「違うけど、ちょっと日本育ちで、ポルトガル語がまあ何とか話せるレベルなんです」っていうふうに説明すると、「それがアクセントの理由なんですね」っていうふうに言われることがあります。（中略）高校生になってはブラジルの方と時々お会いすることありましたが、どっちかっていうと、日本人またはブラジル人じゃない認識はされましたね。

筆者 それを感じた理由はなんですか？

R 「あなたは日本人だよ」っていうふうに言われたことはありますね、ブラジルの方からですけど、（中略）ポルトガル語を使うときには、あまり自由に使えない、ちょっと制限を感じるのですね、それで、どちらかというポルトガル語を母国語³⁾には僕は感じないので、それなので、ちょっとネイティブなブラジル人の方とはちょっと違うかなというふうに思いました。

2回目 45:13-48:12

R は、親と問題なくコミュニケーションができ、また様々な場面で親の通訳が行えることから、ポルトガル語の言語能力は決して低くないと推測される。しかし、発話データ 1、2 の下線部から、R は自身のポルトガル語がネイティブではないと認識していることが分かる。また、データ 3 の波線部の語りから、R がポルトガル語を使用する際に「制限」を感じており、ポルトガル語を母語とは認識していないことが分かる。発話データ 2 からは、R はルーツや国籍はブラジルにあるにもかかわらず、ポルトガル語がネイティブのように話せないことから、自身のアイデンティティを「日本寄り」と認識していることが分かる。

このような R のポルトガル語に対する認識の背景には、発話データ 3 の二重下線で示されたように、周囲のポルトガル語母語話者からの評価や反応が、R のポルトガル語使用時の自信や自己評価に影響を与えていると考えられる。R は別の語りの中で、仕事でポルトガル語を使用する際、ポルトガル語母語話者に対して「僕、日本育ちですので、ポルトガル語が少しできないところがありまして、すみません」と前置きしてから相談に応じていると語っている。このような語りの背景には、R の意識の中に、「ポルトガル語ネイティブの人と話すときは、ネイティブのような発音で正しくポルトガル語を話さなければならない」というような思い込みがあると考えられる。発話データ 3 で示したように、R は高校生の頃から周囲のポルトガル語母語話者とのやり取りの中で、「ネイティブのようなポルトガル語を話していないから、日本人またはブラジル人じゃない人」と認識されていた。このようなポルトガル語母語話者の認識が、R のポルトガル語に対する思いと評価に重大な影響を与えていると言える。

発話データ 4 ポルトガル語に対する学習意欲

筆者 日本語にも英語にもポルトガル語にもまだそんなに満足してないんですが、でも英語はやりたい気分で、ポルトガル語に関しては？

R ちょっと置き去りにしているような感じですね。

筆者 自分の中の理由は何ですか？

R 英語は今までやってきたので、さらに伸ばせばさらに強い、魅力的な能力として、この先に繋がられると思いますし、日本語もちろん常に日本語を使っていますので、もしも伸ばすことができる機会がありましたら伸ばしたいですし、ポルトガル語は、僕正直なところ、ブラジルに帰るつもりはないので、そしてブラジルと関わるような仕事場につきたいとも考えませんので。

筆者 それはずっと変わりがなく、その中学校とか高校のときも、もっと上手になりたいという気分はなかったんですか？ ポルトガル語に関して。

R そうですね、昔からなぜかそうですね、ずっとなかったんですね。

筆者 ポルトガル語がなんか嫌な思い出とかしてたんですか？

R 特にポルトガル語が嫌だったというのはないんですけど。

2 回目 93:23-95:00

発話データ 4 の下線部の語りから、R はポルトガル語使用に抵抗感はないものの、学習意欲を持っていないことが分かる。ポルトガル語は主に家族との会話に使用されているが、R の「置き去りにし

ているような感じ」という表現から、ポルトガル語に対する距離感がうかがえる。R がポルトガル語上達への意欲を持たない背景には、使用機会が家庭内に限られていること、ブラジルに戻る予定がないこと、そして英語と比較してポルトガル語の社会的な実用性が低いと認識していることが影響していると考えられる。

4.2 複数言語環境における日本語使用とその意味づけ

R は来日当初、日本語を全く理解しておらず、幼稚園で文字の学習を始めた。小学校 1、2 年生の頃には言語の壁を感じていたが、特別な日本語支援を受けることなく、日本語を他の母語話者と同じ速度で習得していた。3 年生時には日本語力が顕著に向上し、学校生活を自然に過ごせるようになった。それ以降、日本語能力が学業成績に影響することはなく、文系科目を得意とし、特に英語では優れた成績を収めてきた。R が通っていた小、中、高の学校では外国ルーツの子どもは少なく、学校生活の言語は日本語のみであった。現在、R にとって日本語は職場や日常生活で最も頻繁に使用する言語である。

次に、R は自身の日本語にどのような思いを持っているかを分析する。

発話データ 5 思考の言語

今まで学校では、頭の中では日本語で考えていました。頭の中で日本語じゃない考えをしていた時期が覚えてないです。

2 回目 17:07-18:02

発話データ 5 から、R は日本語を日常的に使用し、思考の言語としても日本語が定着していることが分かる。また、R は日本語について「一番自由に使いこなせる、今まで一番使ってきた言語、常に使用する言語」と語り、学校生活や社会生活において、日本語が R にとって最も不可欠な言語の役割を果たしていることが示されている。

発話データ 6 母語だと思ふ言語

筆者 R さんにとって母語は何ですか？

R ポルトガル語？ブラジル人ですので、ポルトガル語かと思うんですが、日本語なんじゃないでしょうかね。

筆者 一番使いこなせるのが日本語ですね。

R そうですね、一番自由に使いこなして、一番今まで使ってきた言語としては日本語ですね。

1 回目 59:56-60:20

発話データ 7 帰属意識の揺らぎ

僕見た目的には日本人ではありませんし、いくら日本生まれ日本育ちでしても、僕は、日本人としては、見てもらえないと思うんです。帰化しても、見た目からはいつまでもおそらく外国の方として見られるかと思います。ですが、僕ブラジル人と話すと、この人ブラジル人だけど、ブラジル育ちじゃないなっていうのはもう分かりまして、またブラジル人じゃないような対応

されちゃうんですね。

1 回目 60:46-61:23

発話データ 6 から、R は日本語とポルトガル語の間に母語についての認識が揺れていることが分かる。この点について、Skutnabb-Kangas (1981) の母語の定義に従えば、R は「運用能力」と「機能」の観点から日本語を母語と考えていると言うことができる。「習得順序」の観点から見れば、ポルトガル語を母語と見なすことが可能であるが、R にとってポルトガル語は主に両親とのコミュニケーションに限られており、継承語としての側面が強いと考えられる。さらに、アイデンティティの観点から見ると、R は内的基準においてポルトガル語より日本語を母語だと認識している（発話データ 6）が、外的基準ではブラジル人から「ブラジル人ではない」と見なされ、日本人からは外見を理由に「日本人ではない」と扱われた経験があることから、大きな揺らぎを感じていると言える（発話データ 7）。

また、別の語りの中で、R は以前の就職活動で、「日本人ではないから」という理由で断られた経験があることから、「日本で安定して未来を迎えるには帰化した方がいい」と判断したことを語っている。しかし、R は、「僕は日系人として感じていますが、日本人には至らないという感覚です。これまでずっと外国人として扱われてきました。それが悪いわけではありませんが、おそらく、国籍を変えてもその扱いは変わらないでしょう」とも語っており、たとえ日本国籍を取得したとしても、外見を理由に「外国人」として扱われ続けるという認識を抱いていることが分かる。R にとって日本語は最も不可欠な言語であり、自身のアイデンティティを「日本寄り」と認識しながら、外見に基づく社会的な受容の限界を感じていることが分かる。

4.3 複数言語環境における英語使用とその意味づけ

R は小学校時代から英語のアニメチャンネルを視聴し、父親からの勧めもあって英語に対する興味を持つようになった。中学校から英語の学習を開始し、主に興味本位で自分のペースで学習を進めていた。高校では体系的な学習に力を入れ、英検試験の準備や英語学習部活動に積極的に参加した。部活動では週 3 回程度活動し、英検試験の前にはほぼ毎日取り組むほど英語学習に熱心だった。高校時代には趣味として英語の文章を書く練習を始め、現在も続けている。また、英語のメディアや書籍を通じて学習を続け、職場で英語を使う機会を得たことで、実用的な意味を持つ言語としての重要性が増している。R は英検 1 級と TOEIC で 900 点以上を取得し、さらに国際的な英語試験の取得を目指している。

次に、R は英語にどのような思いを持っているかを分析する。

発話データ 8 英語の実用性

筆者 英語ができて、ポルトガル語ができて、よかったと思うことは？

R 英語はよかったと思うことは多いですね、英語でしたら、インターネットでやり方が見つかるので、たとえばなんですけど、ヨーロッパのビザの取得の方法だったり、米国に観光したい場合何が必要かだったり、日本の行政の、書類、リストだったり、そういう生活に必要な情報は英語で探せば出てきます。

筆者 実用性が高いって感じ？

R そうですね、英語が分かる外国の方から相談がありますと、一番対応しやすいです、英語のものが一番インターネットに多く調べやすい言語です。

2 回目 50:45-51:52

発話データ 8 を見ると、R は英語の実用性を強く認識していることが分かる。英語は R にとって、国際的な情報へのアクセスや現在の仕事における重要なツールであり、実生活で高い価値を持つ言語である。また、R は大学で英語学科への進学を計画しており、将来のキャリアにおいても英語を活かせる職業を希望している。このように、英語は R の学習、日常生活、キャリア形成において大きな影響を与えており、R の人生に深く結びついた言語である。

発話データ 9 思考言語の切り替え

筆者 ポルトガル語をやっている時には、ポルトガル語で考えるんですか？

R いいえ、日本語だと思います。

筆者 思考は日本語で考えるんですね。

R はい、そうだったと思いますね。

筆者 英語の時は？

R 英語はなぜ切り替えられます、英語で考えられます。

2 回目 101:47-102:09

発話データ 9 からは、英語とポルトガル語における思考プロセスの違いが明らかになった。R は英語を使用する際には英語で思考できるが、ポルトガル語を使用する際には日本語で考える傾向がある。このことから、英語が思考言語として確立しているのに対し、ポルトガル語は思考の言語としては機能していないことを示唆している。

5. 考察

5.1 R の言語使用の状況

R の言語使用状況を図 1 に示す。図 1 は、R が使用する三言語の使用状況の変化を視覚的に表したものである。線の太さと実線・点線は、それぞれの使用頻度や時期による変化を示す。図 1 の作成にあたり、まず筆者が「R の三言語の言語使用状況」というタイトルの図案を作成し、その内容を R に確認した上、本人の了承を得た。

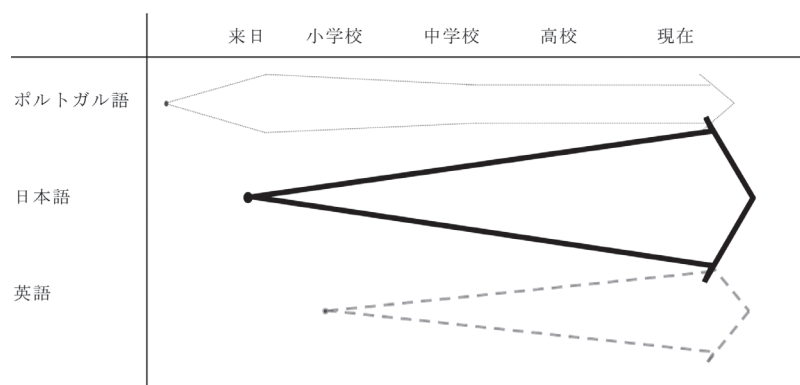


図1 Rの三言語の言語の使用状況

前述したとおり、Rにとって、ポルトガル語は最初に習得し、幼少期から家庭内で使用してきた言語である。小学校で一時的に学習したが、その後は主に家庭内での会話に限定されている。現在は主に両親や親戚との会話で使用されている。

日本語はポルトガル語の次に習得した言語であり、小学校入学後に急速に習得した。それ以来、日常生活や学校生活において問題なく使用し、現在は職場や生活の中で最も頻繁に使用される言語となっている。Rにとって、日本語は優先言語となっており、日常的なコミュニケーションに欠かせないものとなっている。

日本語に次いで使用頻度が高いのは英語であり、中学校から独学で学習を開始し、高校で体系的な学習を経て、現在では高度なスキルを有している。英語は職場、メディア、学習の場面で使用されている。

5.2 Rの各使用言語に対する意味づけとその影響要因

Rは両親とのコミュニケーションのためにポルトガル語を使用しているが、学業や仕事においてポルトガル語の必要性を感じておらず、さらに将来ブラジルへ帰国する予定もないため、ポルトガル語に対する学習意欲を持っていない。この状況は、尾関（2013）の対象者と共通している。また、太田（2021、2022）は、成長過程で継承語に対する意識を変容させる要因として、親以外の母語話者との接触や、留学先で多様な言語話者との交流を挙げている。Rがポルトガル語母語話者から「ネイティブではない」と指摘された経験は、ポルトガル語能力に対する自己評価の低下を招き、結果として、ポルトガル語を積極的に使用する意欲を失わせたと考えられる。この背景には、Rにとって、ポルトガル語母語話者の考え方の中に「ブラジル人であればネイティブのように話すべきだ」というような社会的期待があり、Rはそのプレッシャーを内面化している可能性があると考えられる。

このような状況を複言語主義の観点から見ると、Rは、自身のポルトガル語能力に対する評価と意味づけが適切にできておらず、その結果、自身の複言語能力の可能性を狭めていると考えられる。また、Rのポルトガル語に対する自己認識の背景には、ポルトガル語母語話者のポルトガル語使用に対する固定的な観念がうかがえることも注視しなければならない。ポルトガル語母語話者の意識や考え方も含めて、Rを取り巻く社会全体が多言語性や多文化性を広く受容することの必要性もあると考え

られる。

継承語教育の重要性が広く論じられている中で、Rのような継承語使用者が単に言語を保持するだけでなく、その言語との関係性を主体的に構築できる環境を整えることが求められる。そのためには、Rが自身のポルトガル語力を過小評価せず、「ネイティブのように話さなくてもいい」という価値観が共有される環境を作ることが重要である。また、「ブラジル生まれだからポルトガル語ができて当然」というような固定観念をなくし、複言語主義の理念に基づき、多様な言語が平等に評価される社会の実現を目指すべきである。

次に、Rの日本語について述べる。幼少期に言語の壁を感じながらも、日本の学校教育を通して急速に日本語能力を伸ばし、小学校の段階で日本語がRにとって最も自由に使いこなせる言語となった。この点は、Rが日本語を文化的、社会的な側面で重要な言語として捉えていることを裏づけるものであり、日本に暮らしている文化的・言語的に多様な背景を持つ子どもが、生活の中でどのように日本語を習得し、自らの言語として受け入れていくかを示す一例である。また、日本語はRのアイデンティティ形成において、重要な役割を果たしていると考えられる。Rにとって、日本語は単なるコミュニケーション手段にとどまらず、アイデンティティの基盤として機能している。このような言語とアイデンティティの関係は、文化的・言語的に多様な背景を持つ子どもが、生活環境において主要な言語をどのように内在化し、それを自らのアイデンティティの一部として取り込んでいくのかを理解する上で重要である。

最後に、Rにとって英語は、日本語に次いで頻繁に使用される言語であり、日常生活、趣味、仕事そして将来のキャリアにおいて重要な役割を果たしている。Rは英語を国際的な視野を広げるための手段として意味づけ、英語のスキル向上に強い意欲を示している。この姿勢は、Rが自身の将来やキャリア形成において、英語を重要な言語資源として戦略的に活用しようとしていることを示している。

複言語主義の観点からRの言語使用を見ると、Rはポルトガル語、日本語、英語の三言語を状況に応じて使い分け、それぞれの言語に対して異なる意味づけを行っている。このような言語の使い分けに基づく「言語レパートリー」の形成は、Rにとっての言語使用が単なるコミュニケーションの手段を超え、アイデンティティ形成や社会的関係の構築に寄与していることを示している。

6. おわりに

本研究では、幼少期に来日したRの言語使用をもとに、複数の言語の使用状況と各言語への意味づけを調査した。Rにとって、ポルトガル語は家庭内の絆を維持する言語、日本語は生活の基盤となる優先的な言語、英語は国際的視野を広げるための実用的なスキルとして位置づけられていた。一方で、Rが自身のポルトガル語に対して距離感を抱いている背景には、周囲からの「ネイティブとしての能力」に対する期待や固定観念、社会的評価が影響を及ぼしていることが示唆された。Rの事例は、R自身もRを取り巻く他者も「母語話者のように話さなければならない」という固定観念を持っていることを示している。つまり、複言語主義の「異なる言語が状況や目的に応じて、機能的に補完し合う言語レパートリーとして評価されるべき」という考え方が芽生えていないのである。ネイティブレベルでなくても複数の言語能力を有することに意味があり、複数の言語が補完的に役割を果たすことは社会的に意義深い。このような複言語主義の考え方を広めることは、Rのような言語使用者の自

信の向上や、更なる言語能力の伸長に向けた意欲の向上につながると考えられる。外国人が増加する日本社会において、外国にルーツを持つ個人が自身の複言語使用を肯定的に捉え、自身を支える重要な能力として認識することが重要になると考えられる。今後の課題として、Rのような複数言語環境で育った外国ルーツの若者について、より多くのケーススタディを通じて言語使用の多様性の理解を深める必要がある。特に、異なる言語環境や背景を持つ若者の調査を通じて、より広範なデータ収集が求められる。

注

- 1) このような子どもたちを論じる際には、様々な用語が用いられている。本稿では、「外国ルーツの若者」を、親の出身国・家庭言語・母文化・国籍のいずれかに日本以外の要素を持ち、日本生まれまたは幼少期に来日し、日本で育った元児童生徒と定義する。
- 2) 「伝達言語能力」は生活場面で必要とされる言語能力であり、通常1～2年で獲得され、「学習言語能力」は教科学習に参加するために必要な言語能力であり、5～7年かかるとされる。
- 3) Rは「母国語」という表現を用いたが、本稿では「母語」と「母国語」を同義とする。

引用文献

- 太田真実 (2021)「中国語使用に対する意識の変容過程と継承語教育のあり方—幼少期に中国から来日した若者のライフストーリーをもとに」『ジャーナル「移動する子どもたち」—ことばの教育を創発する』12,74-91.
- 太田真実 (2022)「複数言語内の位置づけから考える継承語—対話的構築主義アプローチに基づくライフストーリーをもとに」『ジャーナル「移動する子どもたち」—ことばの教育を創発する』13,72-96.
- 奥村三菜子 (2022)「複言語主義」異文化間教育学会『異文化間教育事典』(p.218) 明石書店
- 尾関史 (2013)『子どもたちはいつ日本語を学ぶのか—複数言語環境を生きる子どもへの教育』ココ出版
- 小林美希 (2024)「複数言語環境で育ってきた大学生は、日本語を含む複数言語とその学びをどのように意味づけているか」『早稲田日本語教育学』36,7-23.
- 今千春 (2019)「外国にルーツをもつ学生の言語習得に対する管理の一考察」『グローバル・コミュニケーション研究』8,159-182.
- CEFR 共通参照レベル：自己評価表 (2023) https://www.jfstandard.jp/pdf/web_whole.pdf (2024年1月15日)
- 中島和子 (2017)「継承語ベースのマルチリテラシー教育—米国・カナダ・EUのこれまでの歩みと日本の現状」『母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)研究』13,1-3.
- 広崎純子 (2017)「中国系ニューカマー大学生の言語発達と学力形成に関する一考察」『神田外語大学紀要』29,485-505.
- 文部科学省 (2024)「令和5年度 日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査結果」https://www.mext.go.jp/content/20240808-mxt_kyokoku-000037366_3.pdf (2024年12月3日)
- Skutnabb-Kangas, T. (1981). *Bilingualism or not: The education of minorities* (Multilingual Matters 7). Multilingual Matters.